

軍事郵便にみる兵士

高橋峯次郎宛通信をおもな素材とした

鹿野政直

The Significance of Military Mail for the Soldier

- ①兵士に向う視線
- ②高橋峯次郎 人格化された統後・郷土
- ③生存の証明
- ④何のための戦争?
- ⑤望郷と奉公
- ⑥「面輪が変る」経験
- ⑦討伐と宣撫

【論文要旨】

近年の軍事史研究は、「兵士」の全面的な主題化という傾向をみせている。それは、戦後半世紀を経て、日本の戦争責任を更めて問う諸国民の声の高まりに照應する動向である。日本の、でなく、日本人の、戦争への関わり方を追求するこの声に向きあおうとするとき、「兵士」は必然的に焦点として浮上する。

軍事郵便は、「兵士」の考察に当つて欠かせない素材である。ここでは、岩手県和賀郡藤根村で長く小学校教師を務めた高橋峯次郎に宛てて、元の生徒たちから送られた通信をおもな手掛りとして、村からの「兵士」への接近を試みた。高橋は、地方改良から軍事援護という活動に献身した人物で、編集して送りつけた通信『眞友』を軸に、両者は心理的に堅く結ばれていた。

戦地からの通信で、なぜ兵士たちはほぼ一様に、「東洋永遠の平和」のためとの文言を記したのだろうか。その常套句には、國家の唱える戦争目的の口移しという以上

に、動員された自分と動員した国家との間隙を埋めようともがきが働いていた。そのことを、応召した兵士と志願した職業兵士との通信での文言の違いとして検出しようとした。また兵士たちの通信はいずれも、郷里への想いに包まれていた。という以上に、郷里への面目意識にほとんど拘束されていた。たんなる望郷でなく、そこには、残してきた家族の暮しが立つかどうかという切実な懸念があった。後顧の憂いが深かつただけ、彼らはそれを断ちきろうと正義の戦争という観念に身を寄せ、また「國宝師団」の自負をも生成させた。そんな兵士たちの忠節観念は、折から鼓吹されていた武士道観念とは無縁の場所で成り立っていた。

この稿ではさらに、殺すという行為の当事者とならざるをえなかつたための心理的な葛藤と、それへの馴れや、また、なぜ中国人の抵抗がかくも強いのかという、ついに超えられなかつた問い合わせについても検討した。